

人は高みへ、炎は上へ

ガラル地方のポケモンバトルに注目する人々にとつて無視できないのが、年に一度開催されるジムチャレンジだ。

ジムチャレンジャーと呼ばれる参加者は、各地のジムの試練に挑みながらシユートシティを目指す。最後まで勝ち残った一人には、メジャーリーグのジムリーダーが顔を揃えるファイナルトーナメントの参加権が与えられるのだ。

チャンピオンに続く輝かしい道。その起点であるエンジンシティの喧噪を、カブは離れた場所から、一人静かに眺めている。リーグ戦を中断してジムチャレンジャーを迎えるメジャーリーグとは違い、マイナーリーグに所属するほのおジムは、昇格を賭けた戦いにあった。

「さあ始めよう。次の試合までにコンディションを整えないとね」

ボールから飛び出したポケモンたちが、ウォーミングアップを始めた。その強さを結果に結びつけることができなのは、自身の力不足である。

勝ちきれない日々は、苛立ちと呼ぶには重く鈍い感情を、カブの内側に育てあげた。野生のポケモンのように飛び出してきては、気まぐれに絡みついてくるそれを打

ち払う方法に考えを巡らせたとき、男の耳にポケモンの鳴き声と、慌ただしい足音が飛びこんできた。

「すいません、このあたりで男の子を見かけませんでしたか？ ヒトカゲが一緒なんですけど」

真新しい帽子の下で、夕陽を思われるオレンジの髪が揺れる。息を切らせながらカブを見上げるのは、ワンパチを連れた少女だった。

「いいや、残念だが見ていないよ」

「ですよね。お邪魔してすいませんでした」

落胆の表情を消しきれないまま、少女は礼儀正しく頭を下げた。手首に巻かれた真新しいバンドに、カブは思わず目を見開く。

「きみは、ジムチャレンジャーかい？」

少女は大きく頷いた。ジムチャレンジには危険が多いため、エントリーにはリーグ関係者の推薦状が要求される。まだ幼さを残しているが、彼女は実力のあるトレーナーなのだろう。

「わたしたち、待ち合わせしてなんです」

エンジンスタジアムの開会式が終われば、ジムチャレンジャーは三番道路からターフタウンを目指す。だが少女の同行者は、ゲートを間違えてエンジンシティの外れに出てしまったようだ。

「このあたりで、ヒトカゲを連れた男の子を見たって、街の人が言ってたんですけれども……」

うつむいた少女を慰めるように、ワンパチが鼻を鳴らした。マイナーリーグがジムチャレンジに関わらないからといって、困っている子どもを放っておけるカブではない。

「ぼくたちも探そう。きみ、男の子の特徴を教えてくださいかい？」

「ありがとうございます！ わたしはソニア、探している男の子はダンデです」

礼儀正しく名乗った少女の頭から、キャップが舞い上がった。

「この先にはガラル第二鉱山しかない。道を間違えたことに気づいたら、彼も引き返してくるんじゃないか？」

周辺の地理を知るカブの言葉を、ソニアは沈痛な面持ちで否定した。

「ダンデくんは、そこで鉱山に飛びこんじゃうような子なんです。ヒトカゲが止めてくれればいいんだけど」

「それは大変だ。ウインディ」

大きな目に使命感を宿し、ウインディが頷いた。遅い足が地面を蹴り、小石が土を転がる。

「臭いとか、覚えなくていいんですか？」

「大丈夫、任せて」

カブのポケモンにとって、エンジンシティの外れは庭にも等しい場所だ。生い茂る草木の配置も、野生のポケモンの息づかいも知り尽くしている。そこに紛れこんだ

知らない人間の匂いを追うなど、ウインディには日課のトレーニングよりも簡単なことだった。

「どうやら、見つかったみたいだよ」

力強い足音を聞きながら、カブは頷いた。少年とポケモンを乗せたウインディが走ってくる。

「ダンデくん、ヒトカゲ！」

少女の声に、安堵がこもっていた。ヒトカゲがウインディの背を降りて、ワンパチと再会を喜び合う。

「本当に心配したんだから！ ケガはしてない？」

「オレもヒトカゲも元気だぜ。ウインディがオレたちをここまで運んでくれたから、鉱山で野生のポケモンと出くわす暇もなかった。サンキューな、ウインディ」

「本当にありがとうございます！」

二人に続くかのように、ポケモンたちが短く鳴く。微笑ましい光景に、カブは柔らかに目を細めた。

「お兄さんのウインディ、毛並みがいいし、よく鍛えてますねって……カブさん？」

ウインディの大きな体を撫でていた少年の声は、質問ではなく断定だった。マイナージムのトレーナーの顔を知っているということは、彼はポケモンリーグに詳しいのだらう。

「間違いない、ほのおジムのカブさんだ！ どうして気づかなかったんだよ、ソニア」

「だって、ダンデくんを探すのに精一杯で、それどころ

じゃなかったんだもの」

改めてカブの顔を見つめた少女の顔に、驚きと納得が広がった。マイナーリーグとはいえ、彼はジムリーダーである。テレビか雑誌で、一度は姿を目にした記憶があるのだろう。

「ごめんなさい、トレーニング中に声をかけて」

「気にすることはない。トレーニングよりも、人助けの方がずっと大事だからね」

ポケモンたちが賛同の意を示す。ウインディの頬ずりを受けて、ソニアが声を立てて笑った。

「ねえカブさん、トレーニングって、どんなことするんですか？」

ダンデの声と態度は落ちていたが、瞳の奥に熱せられた石炭を思わせる輝きがあった。強さへの渴望と闘争心が、少年をジムチャレンジに導いたのだろう。

「ダンデくん、トレーニングの邪魔になっちゃうよ」

小声で制止するソニアの顔は、しかし好奇心と探究心に彩られていた。強い思いが行動力に直結する子どもたちの姿がカブには眩しく、少しだけ懐かしい。

「トレーニングと言っても、特別なことは何もしていないよ。時間があるなら、一緒にやっていくかい？」

少年と少女は、目を輝かせた。

トレーニングを進めるうちに、カブはジムチャレンジの推薦状を用意したローズ委員長の気持ちがいさだけ理解できたような気がした。二人にはワイルドエリアを乗り越える実力と、無限とも言える可能性がある。子どもの成長を見守りたいと思うのは、ガラル地方の大人ならば当然のことだ。

加えて、ジムチャレンジにはドラマが求められる。撮れ高や視聴率を欲するメディア関係者の迷惑も、委員長は計算に入れているのかもしれない。

「ジムリーダーって、すごいな」

ヒトカゲをパートナーに選んでいる影響か、ダンデは大人のトレナーも悲鳴を上げるカブの鍛錬に貪欲に食らいついてきた。聞けば、普段は家業のウールー牧場を手伝っており、体力には自信があるという。

「本当にね。鍛えているカブさんを見て、ポケモンたちも一緒に頑張ろうって気持ちになるのかな」

ソニアのスケッチブックには、トレーニングに励むポケモンの姿が描かれている。美しさよりも正確さに重点を置いた一枚から、彼女の観察力と表現力の高さがうかがえた。

「見て、コータスの分厚い甲羅。ポケモンの甲羅を調べたら、年齢や生まれた場所が分かるっていうけど、本当かな？」

「人間の筋肉みたいに、鍛え方で見た目が変わったのか

もしれないぞ」

「甲羅って、人間の骨みたいなのなんだよ。トレーニングで鍛えられるのかな？」

「骨を丈夫にするなら、モーマーミルクを飲む？」

考えを巡らせる二人の顔が、カブに故郷の夏を思い出させる。宿題の自由研究には、毎年のように頭を悩ませたものだ。ガラル地方のジムチャレンジならば、研究のテーマと土産話に不自由はしないだろう。

「このままトレーニングを続けたら、どんな風にポケモンを鍛えているのか、きみたちに見破られそうだね」

ポケモンリーグを勝ち抜くには、手持ちポケモンの強化だけではなく、対戦相手の研究が欠かせない。カブがジムリーダーの手持ちやバトルスタイルから作戦を練るように、カブの戦いもまた分析されているのだ。

「……平気なんですか？ オレたちに手の内を見せて」

ポケモンジムもない田舎町から来た子どもたちは、間違ってもスパイではない。少なくとも、ダンデは本気でカブに勝つことを考えている。

「ガラル地方では、人に見られるのもジムリーダーの仕事のうちだからね。ワイルドエリアの奥地か、カムムリ雪原にでも行かない限りは、誰にも見られない秘密の特訓なんて、できないよ」

望むと望まざるとにかかわらず、ガラル地方のジムトレーナーは人々の注目を集めるものだ。録画機器の進歩

は、ポケモンリーグの公式戦はおろか、町角の野良試合さえも世界中に配信する。

「だったら、特訓を誰かに見られても、勝てる方法を考えた方がいい。それに、ぼくもきみたちの特訓を見せてもらったんだ。手の内を知っているのは、お互い様だと思わないかい？」

ポケモントレーナーとして対等に扱われていることを知った少年の顔が、歓喜と闘志に染まった。不安げに二人のやりとりを見守っていたソニアに比べれば、ダンデのほうが自分に近いとカブは思う。

「トレーナーもポケモンも、大事なものは毎日の食事。きみたちが良ければだけど、これから一緒にランチはどうだい？」

生物の本能に訴えかけたカブの提案に、人間よりも早くポケモンが反応を示した。食事に関する言葉を理解しているらしく、全身で喜びを表現している。

「嬉しいけど、いいんですか？」

「ここでお別れしたほうが心配だよ。もしも町に戻るまでにダンデが迷子になったら、お腹が空いて動けなくなるんじゃないかって」

カブが口にしたのは、ガラル仕込みのジョークなどではなかった。トレーニングのあいだ、ダンデは幾度となく、ガラル第二鉱山に向かって走り出そうとしたものがある。ソニアがリーダーを務める迷子捜索チームの負担

を減らすためにも、食事の後は責任を持って彼らをエンジンシティまで送り届けるつもりだ。

「ダンデくんの場合、動けなくなったらほうが、勝手にどこに行く心配がなくなるかもね」

軽口とは思えない口調でソニアが呟き、ダンデが帽子で表情を隠した。

ジムチャレンジへの参加が認められた二人は、調理器具やキャンプ用品の使い方も取得していた。ダンデが火を起こし、ソニアが木の実を切り分ける。

「二人もしっかりしているから、ぼくのやることになくなっちゃうね」

冗談交じりの賞賛に、二人が白い歯を見せた。

「ぼくはライスの準備をしよう」

カレーの準備を任せ、カブはバックバックからライスクッカーと食料を取り出した。途端に二人の視線が手元に突き刺さる。

「どうしたの？」

「ライス、レトルトじゃないんだ」

「カブさんは、ライスの調理ができるんですね」

ポケモントレーナーに対するものとは明らかに種類が異なる敬意に、カブはくすぐったさを覚えた。

「ジムチャレンジの前に、キャンプ料理の練習をしたんですけども、ライスが固くなっちゃって……」

「いいんじゃないか。歯ごたえがあって」

ソニアの失敗をフォローしているつもりなのか、空腹が満たされることを優先するあまり味や食感への関心が薄いのだろうか。ダンデの場合は両方かもしれない。

「良くない。もし、お腹壊したらどうするの？」

「モモンの実でどうにかならないか？」

「ならないよ！」

二人のやりとりで、ヒトカゲとワンパチが呆れたように顔を見合わせた。

「食中毒になると大変だから、食べ物と水には気をつけるんだよ」

ジムバトルやミッションではなく、道中のアクシデントでリタイアするようなことがあっては、ジムチャレンジャーは悔やんでも悔やみきれないだろう。

「ライスも、生で食べるとお腹を壊すからね」

忠告と共に、カブはクッカーに米を移した。彼がガラル地方に足を踏み入れた当時に比べれば、ホウエン産の米は手に入りやすくなったものである。

「それ、スシライスですか？」

「ああ、そうだよ」

スシライスはスシ専用というわけではない。世界中のさまざまな食材が手に入るガラル地方の人々が、ホウエン地方やジョウト地方、カントー地方で栽培されている丸みのある品種を、そのように呼んでいるだけだ。

スシ作りはもちろん、焼き魚やミソスープとの相性も

良い食材。もちろん、カレーもおいしくできあがる。それが故郷の味に対するカブの評価である。

「こんな形のライス、お店で見たことない」

「たぶん、形だけじゃなくて味も違うよ。せっかくだから、今日は炊き方を覚えようか」

ソニアが目を輝かせた。

「おいしいライスを炊くのに大事なものは、火加減と水加減だ。はじめちよろちよろ、なかばっば。エレズン泣いてもフタ取るなど覚えておくといい」

「エレズン？」

「何それ？」

ポケモンが登場した効果か、ダンデが興味を示している。ガラル流のアレンジを加えたのはカブだが、格言自体は古くから故郷に伝わるものだった。

「エレズンって、どんな風に泣くんだろうな」

「聞いてみたいよね」

火にかけたクッカーを前に、会いたいポケモンや行きたい場所を口にする二人の姿は、年相応の子どもだ。カブとしては、お節介の一つも焼きたくなる。

「最初は強火。ライスをおいしく炊くには、火を恐れないことだ」

「はいー」

元気の良い二人の返事に、ヒトカゲとワンパチが続いた。カブはマルヤクデと温かな視線を交わし合う。

「怖がり過ぎる必要はないが、一瞬の気の緩みが、大変なことにつながる。それが火だ」

「……何だか、ポケモンみたいだな」

先ほどまで、草むらに飛びこんでは迷子になりかけていた男児とは思えないほど、ダンデの声は落ち着いていた。金色の瞳が、カブに静かに燃える夜の焚き火を思い起こさせる。

「きつと同じだよ。火事や火傷は怖いけど、怖がってただけなら、料理はできない。昔の人は、ポケモンのことだって怖がってたんだよ」

ソニアの手が、ワンパチの背を優しく撫でた。

「でも、今はこうしてポケモンと一緒に色々なことができる。何かを怖いと感じるのは、身を守るためには大事なことで、ずっと怖いまま立ち止まってたら、何もできないままだよ」

「オレたちのポケモン博士が、ああ言ってるんだ。怖がりなのは悪いことじゃないんだぜ」

膝によじ登ったヒトカゲを、ダンデが両手で抱え上げた。トレーニングの際の行動で察してはいたが、どうやらヒトカゲは臆病な性格らしい。

「恐怖を自覚して、乗り越えること。その大切さに気づいているなら、きみたちのジムチャレンジは、きつと上手くいくだろうね」

少なくとも、子どもたちがワイルドエリアの奥地で遭

難するような結末を辿ることはないだろう。恐怖を分かち合える仲間という、人生においてかけがえのないものを、既に彼らは得ているのだった。

「そして今、きみたちが向き合うのは、炎だ。中身が吹きこぼれる前に、火を弱める」

蒸気がクッカーのフタを押し上げた。カブはマルヤクデと力を合わせ、火の勢いを落とす。

「火が消えちやいそう」

「その心配はないよ。ライスを炊くには、この消えそうで消えない火加減をマスターするんだ」

火の扱いを自分の役割と心得ているのか、焚き火を見張るヒトカゲは真剣そのものだ。消えそうな火への不安を宿しながらも、ソニアとダンデも、クッカーの変化を見守っている。

「まだフタが動いてるね」

「火は弱くなったのに、不思議だな」

吐息で火を吹き消してしまわないように、小声で言葉を交わす二人に、カブは先手を打った。

「エレズン泣いても、フタ取るな。クッカーの中がどうなっているのか、気になるだろうけど、まだフタを開けてはいけないよ」

「はじめちよろちよろ、なかばっぱい！」

「エレズン泣いてもフタ取るな！」

故郷の格言が次の世代に語り継がれる瞬間は、カブの

想像以上に明るく、軽快だった。歌うように繰り返す子どもたちに合わせて、ポケモンが手足や尻尾を打ち鳴らす。

「エレズンもカレー食べるかな？」

「早く会いたいね！」

キャンプとジムチャレンジを、二人は心から楽しんでる。彼らの快活な笑い声とともに、ホウエンの言葉は異国の片隅に残り続けるのだ。

険に蘇った故郷の風景は、否応なくカブの記憶を呼び起こす。恐怖を知り、自身の無力を弁えていながら、それでも歩みを止めなかった男は、異国の地に立つ己に問いかける。楽しめているのかと。

「きみたちは本当に楽しそうだ。もしもメジャーリーグにいたら、ぼくはもっとたくさんさんのジムチャレンジャーと出会えていたのだろうね」

水と空気に肌が馴染んでも、細長いライスを舌が慣れても、ガラル地方はカブの故郷になり得ない。だからこそ、バトルが、キャンプが、彼の心を刺激するのだ。勝敗を越えた人生の楽しみは、そんな日々の営みに存在するのかもしれない。

「カブさんがジムチャレンジャーに会いたいのなら、おれの迷子も、役に立ったな」

「調子のいいこと言わないの」

「そうだよ。道が分からなくなったら、時には立ち止ま

ることも大事だからね」

忠告したものの、ダンデが進まずにはいられない気質であることを、カブは見抜いている。熱せられた空気は重いフタを押し上げて、空に向かうものだ。

「おいしいライスを炊くのに、弱火が欠かせないのと同じだ。立ち止まって、休む時間が、きみたちをさらなる高みへと押し上げる」

フタの音が止まったクッカーを、カブはキャンプ用のテーブルに移した。まだ幼い二人には、彼の言葉を理解するよりも、ライスの火加減をマスターするほうが容易いかもしれない。

だが、焦る必要はない。生まれた土地や年代は違えども、彼らはポケモントレーナーであり、目指す場所は同じなのだ。太陽の眩しさを瞼に残しながら、カブは身の内に宿した炎で上を目指す。

「あとはライスを蒸らすだけだ。エレズン泣いても、フタ取るな、だよ」

トレーニングを開始したときからは想像もつかない穏やかな気分で、カブはクッカーを見守った。

隣の鍋からは、カレーの匂いが漂っている。